

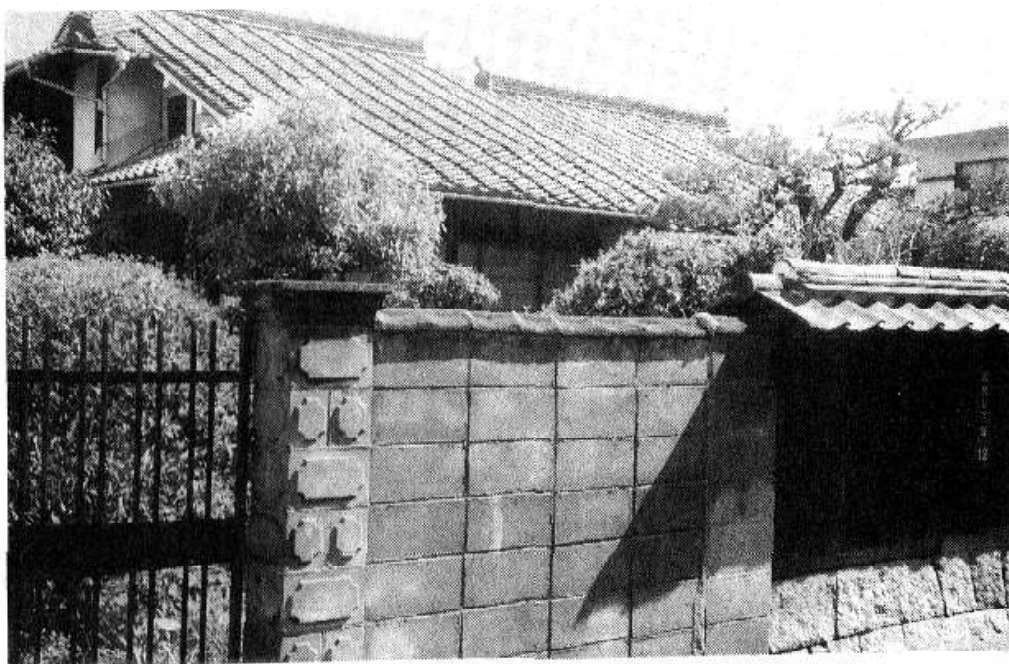
ISSN 0286-1968



河上肇記念会会報

NO. 37

1991・5・1



目次

河上肇没後四十五周年記念の集い	1
河上肇詩注余話(一)	2
河上会あの人、この人	
堀江邑一さん	
インタビュアー 小嶋康生	7
河上肇と『第三の経済学』に思いをはせて	12
鈴木一典	
〈会員近況〉	14
「末川博先生生誕百年」に思う…	15
砂田 寛	
「短歌」京都点景	16
石井公代	
山口河上会の第六回総会開かれる	17
会員通信	18
お願い	23

河上肇没後四十五周年記念の集いのお知らせ

一九四六年一月三十日、河上博士が亡くなって今年で四十五年になります。その間、国の内外でいろいろな出来事がありました。特にこの九十年代に入って世界は激動しております。そこで次のような記念講演を企画しました。ぜひご参加下さいますようお願い申し上げます。

日時 五月十八日(土) 午後一時～四時

場所 大阪郵政会館(大阪市北区堂山町)

講師とテーマ

「開会挨拶」

京都大学教授 池上 淳先生

「河上肇と孫文」

神戸大学教授 一海知義先生

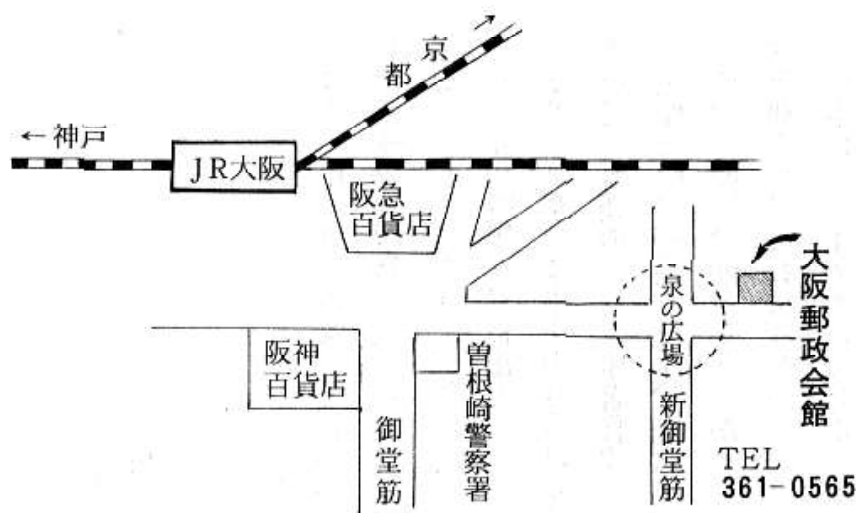
「現代資本主義と社会主義」

大阪経済大学教授 置塩信雄先生

「閉会挨拶」

河上肇記念会事務局 大門英太郎氏

講演終了後「懇親会」をいたしますので、多数ご出席下さい。(会費 三千元)



- 大阪駅から徒歩約7分大阪駅東出口から阪神百貨店の地下街に出て広場を斜左に歩くと泉の広場へ直進する階段31番右側を登って3軒目

河上肇詩注余話（一）

一 海 知 義

筑摩書房が企画した『河上肇全集』の編集委員を引き受けたのは、今から十四年前（一九七七年一月）、私の担当は詩歌の部分および「陸放翁観賞」だった。

その前年あたりから、ある新聞に連載中の短いエッセイで、折りにふれて河上さんの漢詩をとりあげていた。また、当時すでに絶版になっていた好著『陸放翁観賞』——この本は、私が『陸游』（岩波書店一九六二年）という小さな本を執筆中に熟読していた——を、ぜひもう一度人々の読みやすい形で提供できたら、とかねがね思っていた。そんな因縁もあって、私は筑摩の仕事を引き受けることにしたのである。

その後、筑摩は不運にも倒産し、全集の編纂は岩波書店が引きついだ。編集委員たちも、そのまま岩波に移った。

全集が毎月一冊という形で出はじめたのは、五年後の

一九八二年一月である。翌月の第二回配本が、私の担当した「陸放翁観賞」（第二〇巻）だった。そして漢詩作品をふくむ「詩歌集」（第二二巻）は、第二四回配本として一九八四年二月に出た。

さて、筑摩の仕事を引き受けた私は、その仕事に重ねる形で、既刊の『河上肇著作集』『河上肇詩集』（いずれも筑摩書房、一九六五年、六六年刊）のほか、単行の日記抄、書簡抄、随筆集などから、河上さんの漢詩作品だけを搜集し、これに注をつけはじめた。漢詩に注をつける仕事は、全集のためではなく、私の個人的興味による。搜集と施注の仕事は比較的早く終り、同年（一九七七年）十月二十日——全くの偶然だが河上さんの第九八回誕生日当日、岩波新書の一冊として刊行された。『河上肇詩注』である（以下『詩注』と略称する）。

ところで、当時はまだ河上日記のかなりの部分が公表

されておらず、書簡（のちに全集の五冊分を占める）も、ほとんど集められていなかった。そうした資料的不十分さに加えて、私の河上研究もはじめたばかりであった。

したがって、『詩注』には不備な点がすくなくない。その後、全集編纂の過程で、未見の作品が新たに出てきたり、施注の不備に気づいたりした。

ここでは、それら不十分な点を補正すべく、その後の知見を「余話」としてまとめ、何回かに分けて披露してゆきたい。読者の批正を得られれば幸いである。

一、「閉戸閑詠」以前

河上さん生前の自選詩集（手書き草稿）に、次の四種がある。

閉戸閑詠第一輯

閉戸閑詠第二輯

うた日記

枕上浮雲

これらは、一九三七年（昭和十二年）六月の出獄直後から、一九四六年（昭和二十一年）一月の逝去直後まで、その間のほぼすべての作品を年代順に収める。

ところで、河上さんが本格的に漢詩の創作をはじめ

るのは、出獄後の昭和十三年であり、漢詩作品はすべてさきの四種の自選詩集が収めるはずである。しかし出獄前にも、ごく少数ながら漢詩を作らなかったわけではない。私が『詩注』を書いた当時、「閉戸閑詠第一輯」以前の作品として、七言絶句一首だけが見つかった。したがって、『詩注』はその一首を収める。ところがその後、さらに二首、前の作品のあることがわかった。

ここでは、まず『詩注』が収める一首について施注の不備を補い、つぎに新たに発見された二首の作品を紹介したい。

『詩注』が冒頭に収めるのは、一九三三年（昭和八年）、獄中で作られた次の一首である（同年二月十八日付秀夫人宛書簡に見える）。

年少夙欽慕松陰

後学馬克思礼忍

読書万卷竟何事

老来徒為獄裏人

この詩、河上さん自身による訓点（返り点と送り仮名）

が一部分施されているので、それらにも拠りつつ読み下し文になおせば、次のようになるだろう。

年少 夙に松陰を欽慕い

後に学ぶ 馬克思 礼忍

読書万巻 竟に何事ぞ

老来 徒に為る 獄裏の人

——若いころ、早くから吉田松陰を敬慕していたが、のちにマルクス・レーニンを学ぶようになった。そして万巻の書を読破したが、それが一体何になったというのか。年をとった今、私はいたずらに獄中囚われの身となつて、むなしい日々を送っているにすぎない。

この詩、河上さん自身が、

「差入れて貰った唐詩選を読んでいる中に、自分も唐人のねごとの真似をした。もとより平仄など合って居るにあらず。」

というように、平仄はもとより、脚韻も合っておらず（陰・忍・人は日本の漢字音ではいずれも目で終わるが、中国の韻書によれば、それぞれ侵・軫・真、と別の韻）、また、二・二・三という七言のリズムに合わぬ句がある。

しかし詩想はいかにも河上さんらしく、「達意の詩」(?)である。

ところで、この詩の第三句「読書万巻」の四字について、『詩注』では何の注も加えなかった。杜甫の詩「韋左丞丈に送り奉る」に、「読書破万巻、下筆如有神」書を読みては万巻を破り、筆を下せば神有るが如し」という句があるが、河上さんはそれをふまえているわけでもなく、「万巻の書を読む」というのは自明の表現だろうと思つたからである。

しかし、『詩注』が出版されたあと、高崎市在住の太田栄一という読者の方から注意があつた。あの四字は、松下村塾の塾聯の文句をふまえているのではないか、というのである。

塾聯のことばは、『吉田松陰全集』（一九三五年、岩波書店）第三巻に次のように見える。

自非読万巻書 寧得為千秋人

自非輕一己勞 寧得致兆民安

塾聯とは、対句で表現された塾のモットーのごときものであり、次のように読むのだろう。

万巻の書を読むに非ざるよりは、寧ぞ千秋の人と為るを得ん。

「己の勞を輕んずるに非ざるよりは、寧ぞ兆民を安きに致すを得ん。」

——万卷の書を読むようであれば、どうして千年先に名をのこす人物となり得ようか。おのれ個人の労苦など何でもないと思うようであれば、どうして億兆の民を安寧に導くことができようか、というのがその大意である。

河上さんの詩、第一句で「松陰を欽慕」したというのだから、第三句の「読書万卷」は当然この塾聯をふまえるはずである。とすれば、詩意はいっそう深まる。千秋の人たらんとして万卷の書を読み、さらには、一己の勞を顧みず、億兆の民を安き導かんと願って行動してきたのに、という意味が詩の背後に加わるからである。

私は太田さんに感謝して、その後、萩の松下村塾を訪ね、今もかかげてある塾聯をこの目で見てたしかめた。一瞬、松陰像に河上像がオーバーラップしたように思った。

さて、河上さんの獄中の漢詩は、もう一首ある。それは、全集編纂中、集められた膨大な量の手紙の中から発見された。弟の左京さんに宛てた、一九三三年（昭和八

年）三月十三日付の書簡である。詩は「獄中偶成」と題して、何の説明も加えず、次のようにしるしてある。

截然離世間

身似深山僧

心頭無片雲

明月万鉄窓

かりに読み下し文をそえれば、

截然 世間を離れ

身は深山の僧に似たり

心頭 片雲なく

明月 鉄窓に満つ

かつて私は、この詩をある雑誌で紹介し、次のような短い解説を試みたことがある（のち一九七九年筑摩書房刊『河上肇と中国の詩人たち』所収）。

「獄中、しかも未決の拘置所内のこととて、参考に供すべき漢和辞典や詩歌の書物などはなく、脚韻も平仄もととのえられていない。しかし、日本人の漢詩にありが

ちないいわゆる和臭（和習）がなく、詩意は明快で、詩味も浅くはない。心象風景と実景とを交錯させたところなど、のちの作品の含蓄を予見させる。」

さいごに、『詩注』刊行時未見のもう一首。これはさらに時代をさかのぼり、一九二七年（昭和二年）、河上さん四十九歳の作である。

これもやはり書簡（同年九月八日付の櫛田民蔵氏宛書簡）に見える。

平仄の合わせぬ詩をつくりました。

去秋亡愛子

今春別慈父

傷心半似安

洛陽一書蠹

第一句「去秋愛子を亡う」は、一九二六年（大正十五年）九月、長男政男さん（二十四歳）が長い闘病の末ななくなったことをいう。

第二句「今春慈父に別る」は、翌二七年（昭和二年）の三月、故郷岩国での父忠氏の永眠（七十九歳）をいう。

そして第三・四句「傷心半ばは安らかなるに似たり、洛陽の一書蠹」。洛陽は、京都、書蠹は、本のムシである。もちろん河上さん自身のこと。

この詩についても、かつて私は「愛児の死と詩」と題して紹介・解説を試みたことがある（一九七九年新評論刊『河上肇―学問と詩』所収、杉原四郎氏との共著）。その中で、第三句「傷心半ばは安らかなるに似たり」が、象牙の塔から実践活動へとふみ出してゆく河上さんの、当時の微妙な心理を、微妙に表現し得ていることについて、ややくわしく論じた。

この作品もまた、脚韻・平仄ともにととのえられていない。しかし、いわば漢詩のツボを心得て作られており、何よりもアクチュアリティに富むところが、いかにも河上さんらしい。

以上二首が、『詩注』刊行後現在までに発見された漢詩作品である。

河上会あの人、この人

堀江邑一さん

——（インタビュアー）小嶋康生

河上肇記念会会員最長老が堀江邑一さん、九十五歳。河上博士の最も身近にいた一人で、長谷部文雄、宮川実両氏とともに学燈をついだ愛弟子である。戦前、拘束されること三度、波乱の多い半生であった。戦後は日ソ友好運動につくされたが、河上会で蔭のリーダーの一人であった。

河上肇と、その弟子たちのさまざまな、昭和史のなかで、グローバルに活動された堀江さんの思い出を所沢市のご自宅で聞いた。

堀江さんは相変わらず意気盛ん。河上会を今日こそ大きなものにしてほしい。およばずながら応援しますと力強い声が聞けた。

——近況を聞かせて下さい。

白内障の手術をしてから家にこもる日が多くなってし

まった。どんどん外に出たいが、残念ながら法然院まではムリだな。

机に大きな蛍光灯を二つもつけてもらっているの、読み書きはできる。『赤旗』をかつちり読む、これが日課だ。身の回りのことは隣家が姪の笠井家、この一家がよくやってくれる。

▲九十五歳の堀江さんは一人暮らしときいて心配していたが、姪の笠井さんが泊り込みで身の回りの世話をしてもらえる。お伺いした時、堀江さんは奥の間のデスクに坐わり、赤えんぴつを手にして新聞をたんねんに読んでおられた。大きな天眼鏡がデンと机の上を占領していた。▽

——それにしてもお元気、大慶の至りです。

長寿の筋なんだナ。甥や姪ら五十四人もいる。数年前、郷里の徳島へ帰ったら、縁者の堀江英一（京大名誉教授）

の一族の者らが長寿競争しよう、というから、よかろう
といっている。天が活かしてくれている間は、がんばり
ますよ。

——今年は河上博士の没後四十五年にあたります。い
ろいろ感慨もありでしょう。

そうか、もう四十五年か。いま、河上会に集まってく
ださっている皆様には感謝の気持ちで一杯だ。

東京の河上会は白石凡君が世話役をしていたが、彼が
いなくなつて残念だ。白石は山口高商、京大で三年下の
後輩、私が卒業と入れ替わつて入ってきた。気安く語り
かけるものがいなくなつてナ。京都の河上会は、大門
(英太郎)さんがよくやってくれているので安心してお
る。

——河上肇記念会の会員も河上博士を直接、存じあげ
ている方が少なくなっています。そこで直弟子の先生か
ら思い出などをお聞きしておきたい。

河上先生には、いろいろとご厄介になった。大恩の人
だ。河上先生なくば、今日の私はない。

山口高商に入学したのが大正五年。中国語など一生懸

命勉強したが、まだ進路を決めかねていた。後に満州建
国大学の学長になられた作田荘一先生が『経済学が一番面
白い』といわれた。そして、京大へいけと河上先生への
推薦状を書いてくれた。

作田先生の紹介で河上先生の門を叩いた。当時は新学
期は九月だったが、三月に京都にいき、いまから入門さ
せてほしいとお願いをした。先生はジロリと私をみなが
ら『そうか、それなら今から指導してやろう』とおっしゃ
った。嬉しかった。その喜びは今でも覚えている。

京都大学に経済学部が独立したのが大正八(一九一九)
年だから、私は一期生となる。同窓には谷口吉彦、福井
孝治(大阪府大学長)、岩城忠一(和歌山高商教授)ら
がいた。長谷部文雄は二期生なんだ。

——博士の『貧乏物語』がベストセラーとなり、令名
とみに高まったころですね。

先生は、まだブルジャー経済学をやっておられた。私
も熱心なクリスチャンであった。

京都二条に有名な菓子店で『鍵屋』というのがあった
が、その裏にあった御幸町教会に日曜ごと通っていた。
山口時代から親しくしていたメソヂスト派の牧師がい

たからだ。その牧師が米国に留学したので、その留守宅を預かり、大学に通った。

大学では先生がマルクス主義の勉強を深められていく中で私にも歩を合わせた。

——堀江さんがマルキストとして活躍される舞台はドイツでしたですね。

河上先生のお力で、新設された高松高商にお世話していただいた。欧州に留学したのは一九二六年で、谷口(吉彦)君や有沢広巳君(当時、東大助教授)らと同じ船(日本郵船の諏訪丸)だった。ちなみに谷口は、またいとこの堀江英一の指導教官になってくれるなど縁が多かった。

欧州のことは昔、河上会報(東京)などに書いたので重複は避けるが、イギリスで労働党の階級的な裏切りを、この目でみて改良主義に見切りをつけた。そして、ドイツでマルクス・レーニン主義をいちから研究し直した。ご承知のように蠟山政道氏(東大教授)らとベルリンの留学生グループで社会科学研究会を発足させる。そして国崎定洞氏(東大医学部助教授)の手引でドイツ共産党に入党した。

△この間のことは河上肇全集月報二八号で「思い出すままに」で触れられてある。▽

——帰国後も国崎氏と、河上博士や地下の日本共産党の連絡役を引き受けておられた。そして一九三三(昭八)年、文部省の在外研究員として東亜同文書院(上海)にいかれますが、その前に尾崎秀美先生とコンタクトをつけておられた。

高松高商には木村益太郎という先生がおられた。山口高商時代からの知りあい、東京商工会議所専務理事から高松高商に來られた。その木村先生から大阪市大が『中国経済』に力を入れているのでいかにいかとお話があり、同窓の福井君も『来いよ』と誘ってくれるので、その氣になった。そこで、中国経済をテーマにした博士論文を、まず書き上げるため東亜同文書院にわたった。尾崎君とは当時、大原社研にいた細川嘉六さんを通じて知った。細川の家が伊丹にあり、ドイツから帰国後、よく伺った。尾崎君は朝日の上海支局から転勤で大阪本社に戻ってきたころだ。

尾崎君は後にゾルゲ事件の犠牲者となったが、彼のやったことは反戦平和のため闘ったということだ。上海で十分、活動もしない間に高松高商の学生事件に私が糸をひ

いているやに嫌疑され、検挙され、連れ戻されてしまった。昭和八年のことだ。

——上海といえば、河上博士の女婿、鈴木重蔵さんが一九三八年に赴任しますね。

鈴木は蜷川（虎三）君の世話で河上博士の二女芳子さんと結婚した。蜷川君は大学で一年後輩で、ベルリン時代も一緒だった。

その鈴木 of 再就職のことで河上先生に頼まれた、山口高商に推薦もしたが、結局、満鉄ということになった。私が尾崎に頼み込んだと記憶している。当時の満鉄は前歴者でもとってくれたから。そして鈴木は満鉄の上海事務所に長い間つとめ、第一六満鉄事件の後に大連勤務となった。

——堀江さんも、その後、満鉄ですね。

高松高商事件で捕まり、大阪市大行きもフィとなり、東京に出た。そこで尾崎君らの昭和研究会に積極参加した。そうこうするうち、満鉄が中国語の達者なものを欲しがっているというので尾崎の推薦で入った。

往時茫々、友は皆いなくなってしまった。たった一人

残ってしまったよ。

▲堀江さんの書斎には、先立たれた夫人と父君の写真に合わせ、河上博士の直筆『出獄の歌十首』、『同志野坂を迎えて』が飾ってある。▼

この『出獄の歌十首』を谷口善太郎君（元衆院議員）がみて、『キミ、いずれは国宝ものになる呂宋だぞ』といってくれた。河上先生が出獄される時、前夜から『先生の甥』というふれ込みで迎えにいった。新聞記者も数多くきており、出獄の感想の代わりに示されたのがこの十首。あとで先生におねだりして頂戴したんだ。

——河上先生の他に思い出の多い方々は数多くおられますが、中でも忘れがたいとなると誰でしょうか。父親だ。親には随分、面倒をかけた。治安維持法で三回捕まったが、親は一言の不平もいかなかった。周囲のものには、『ありゃ、いい男だ。運が悪いだけだから仕方ない』といていた。内心は私の立身出世を望んでいたろうが。

ところで、河上会の面々は元気かな。及ばずながら会の発展に協力したい。私の名前がお役に立つのなら大いに使ってください。

私は戦後、鳩山（一郎）さん（元首相）をかついで日ソ協会の仕事に打ち込んだ。日ソ協会のことも気になるが、それ以上に河上会のことにも念頭から離れない。会の発展を祈念している、皆さん、頑張ってください。



注：このインタビューは一年前のものである。会報に掲載するにあたり、原稿をもってお伺いするつもりで笠井さんに電話をしたが、お任せするとのことであった。相変わらずお元気で、散歩にも出かけておられるが、姪御さんを杖にしての毎日のご様子。

河上肇と『第三の経済学』に思いをはせて

鈴木 一 典

私と河上肇ととの最初の出会いは、河上が京大の学史を講義するようになってほだない頃河上に師事した石川興二の経済思想に関心を持ったことにはじまります。戦後経済学を学んだ方は石川興二の名前もおそらく知らないと思うのですが、石川は経済学史を河上の下で学ぶかたわら西田幾多郎に哲学を学ぶという二足の草鞋を履いた当時としても一風変わった経済学者であり、石川自身自負するように「西田先生に親しく教を受けた只一人の経済学究」（下村編『西田幾多郎―同時代の記録』一三五頁岩波書店）というのも誇張ではありませんでした。

後年石川は西田哲学を基礎として、既成のマルクス経済学でもない、文字通り石川の主著にありますように『第三の経済学』（有斐閣一九六三年）を著しましたが、戦後の社会科学の世界は、あくまで主流はマルクス経済学であり、また高度経済成長に伴って近代経済学が高度成

長をとげるといって、いわば二極構造であり、それ以外を認める寛容さはまったくありませんでした。ですからマル経、近経といういわゆる既成の中からはドロップしてしまふ石川の試みはあまり注目されることもなく、石川の名も知られることなくいわば埋もれておりました。

私が石川に関心を持ちました契機は、経済学は表層的な市場経済だけを視野とする狭い枠組では、世界を読み解く座標にはもはやなりえないだろうと考えた点にあります。一九七〇年以降資源枯渇・環境汚染が誰の目にもはっきりと危機的様相を示しはじめ、経済学の自己批判の試みも行われるようになりました、仏教経済学、あるいは経済而上学と、従来のパラダイムを転換すべきであるという気運も高まってきております。そこで日本においては既成の経済思想にとらわれない先駆的試みとして注目されるのが石川の『第三の経済学』の試みであり、

河上の『資本主義経済学の史的発展』におけるラスキンといえるのではないでしょうか、そんな思いで石川や河上を読みはじめました。

河上はその弟子榊田に宛てて、次のような私信を送っています。「親分子分観、うれしく拝読しました。仰の通り私は子分といふものを有たぬ。私の有って居るのは知己である、友人である、同志である、真理と正義の前に頭を並べて拝跪せんと志せる一味の道人である。しかし其数は至って少ない。只今京都には一人居る。その一人が今年の七月には大学を卒業する筈である。今一人は東京に居る。それは君である。其他に殆ど知己は無い、しかし私は其で沢山だ。」（『全集』二四巻五六頁）「京都には一人居る」といわれた人、これが石川であります。河上は石川が学部を卒業するにあたってイギリスから取り寄せた『ミル自伝』に「学に志す者へ」を書き添え贈っています。この一文は杉原編『河上肇評論集』（岩波文庫）の口絵に掲載されていますのでご存じの方も多いと思います。

私は河上が榊田には同志が二人いるとして、一人は榊田、もう一人を石川の名をあげていますが、これには大変象徴的な意味が含まれていると思うのです。といいま

すのは河上は京大を去り、実践活動に邁進し「不屈のマルクス主義者」という面が確かにあります、『自叙伝』をして「世はいかにしてマルクス主義者となりしか」と副題を付けることが出来ると、しばしば指摘される通りです、人道主義者河上をしてマルクス主義へとむかわしめたのは榊田の役割大とせねばなりません、ですがもう一方で『史的発展』の河上、また晩年は宗教の中に明確に一つの真理を読みこもうとした河上がありました。私はマルクス主義というものさしでは割り切れない河上の一側面を継承したのが、石川興二だと思っています。

石川は河上の後を受けて京大の学史を担当し、河上とは終生変わらぬ師弟関係がありましたが、今日に至るまで河上研究の中に石川の位置はドロップしているのではないかとさえ私には思われそれが残念でなりません。マルクス主義河上の姿こそ河上本来の面目とするなら、マルクス経済学には批判的であった石川は「亜流」であるのかもしれない、ただ私にとって魅力ある河上は『資本論入門』の河上というより、『社会主義評論』の河上であり、『貧乏物語』の河上であるのです。

私は河上の人道主義的側面を継承したのが、石川でなかったかと考えているのです、主観的すぎるのかもしれませんが

ませんが、こんな河上の読み方をしても良いのではない
か、ベルリンの壁以降の世界にあって、時代がそんな河
上を必要としているのではないかとさえ思うのです。で
すからこれからも石川興二と河上肇の経済思想について

勉強していこうと思っています。

(石川興二氏についての資料、情報などございました
ら、お知らせ下さい。)

〈会員 近況〉

―山下肇先生の「さよなら書画展」開かる―

昨年の総会でご講演いただきました山下肇先生(関大
教授、東大名譽教授、ドイツ文学)が関大を定年でおや
めになり関西を離れますのを機会に「山下肇書画展」が、
三月一八日から二十三日まで、大阪梅田の「東宝画廊」
において開かれました。

自筆の色紙、短冊、中国旅行のスケッチ、カフカの肖
像等と共に昨年総会でご披露なさった揚烈先生の漢詩が
展示され、その側に会報第三六号が添えられていました。

―稲次先生自叙伝「命燃して」寄贈さる―

本会会員稲次直巳先生(大阪生野区協同診療所顧問)

が昨年十二月に「命燃して、多くの人達と共に」を出版
されました。事務局でお願いしたところ、快く寄贈下
さいましたので、ご希望の方にお貸ししますからお申込
下さい。

稲次先生は一九〇九年、北但馬の大屋町加保にお生ま
れになり、豊岡中学を経て大阪高等医学専門学校(現大
阪医大)に入学されたが一九三三年学生運動のため特高
に拘禁され、退学処分をうけられたのでした。その後復
校され卒業後大阪日赤病院の医師になりました。もし
て、戦中、戦後大阪で民主的医療活動に献身されました。
その自伝的記録が「命燃して」で三八八ページに及ぶ大
著です。

(事務局)

「末川博先生生誕百年」を思う

人間の長い人生には誰もが何らかのかたちで学びつつ老いていくのではないだろうか。私は向学心に思い立って、一九六〇年、二十一歳にて京都で学ぶことになった。それから今日で満三十二年の歳月を経過し、五十三歳になっている。京都で沢山の師から学び師を知ることが出来、自己満足ではあるが京都での学びを基礎にして自己の教師としての職業を曲がりながらも全とうしています。そんな事から京都で河上祭に参加し多くの経済学者、法学者、哲学者、思想家を知ることが出来た。例は、石川興二、末川博、岸本英太郎、佐伯千仞、船山信一、等の先生、枚挙に尽きない。その中でも末川博先生の思い出は印象が強い。京都の河上祭は、京都大学や立命館大学で盛大であった。その時、何時も河上秀夫人をおつれて、京都大学、立命館大学をかけもちで、挨拶に立ったのが末川先生であった。その末川先生の郷里山口県で現在も私は教師生活をしております。その心の誇りが先

生から頂戴した色紙である。：「未来を信じ、未来に生きる、そこに教育者の生命がある」砂田君のために博生印……と書いてある。つまり私にとって教育者の使命を教示してくれたのだと確信し、今日、私が存在しているのだと思えてならない。末川博先生は一八九二年山口県玖珂郡玖珂町瀬田で生まれ、一九七七年、八十五歳で没している。つまり一九九一年十一月を以って生誕百年になる。出身地玖珂町の名誉町民でもある先生は偉大な教育者でもあり、法学者でもあり、民主主義者でもあられたことから生家の庭先に故大西清水寺管長のお言葉による記念碑が建立されている。末川先生は京都人として生涯を終えられたとはいえ、山口県においても大変評価の高い人柄であった。そんなわけで地方人的立場から末川博先生の御生誕百年を思い起こさせていただきます。

岩国市在住 砂田 寛

短歌

京都点景

四條大橋

吹き荒ぶ寒風の中に托鉢の僧ひとり佇つ大橋の上

法然院

河上先生の墓に詣りて傍に建つ歌碑を眺めて法然院を出
ず

京大にて

京大のカンパスに入り幾十の碩学偲び漫ろ歩けり

四條河原町

色白く見目麗しき京女に出合いて楽し四條河原町

祇園にて

かにかくに祇園は懐かし舞妓らがぼ・っ・く・りの音たてて来

るにぞ

西宮市 石 井 公こう 代しろ

舞妓らの綺羅は美しさりながら銀の簪揺るるが悲し

嵐山にて

― 周恩来氏の詩碑を訪ねて ―

○杖曳きて訪ね来たりし甲斐ありて詩碑は大きく林間に
坐す

○詩は明澄に雨中嵐山を詠み志は高く真理を求む

註、周恩来氏は若い頃京都で河上肇先生の「社会問題
研究」を読んで、初めてマルクス主義の真理に触
れた由。この詩の最後にその一端を詠み込みあり。

○心にくき仕種にてあり花束を詩碑に供えし人のあるに
ぞ

山口河上会の第六回総会開く

山口河上会の第六回総会と記念講演会が、岩国中央公民館で四月七日午後一時半より開かれました。記念講演会では先ず共催者の岩国市立図書館館長の賀屋宏昌氏があいさつされ、九州大学助教授の清水靖久先生が、「学生時代の河上肇―木下尚江との出会い」と題して一九世紀末から二十世紀初頭にかけての日本の情勢と河上と木下とのかわりあいを話されました。

講演後、第六回総会が砂田寛氏の司会ではじまり、細迫朝夫代表世話人が経過報告と財政報告をされました。当日は雨と県会議員選挙のため出席者は約二十名でしたが、来年に向けて会の強化と会員拡大を誓い散会いたしました。

(沖本 記)



会員通信

会報三五号発送後、三〇〇名近くの方から会費を振り込んでいただきました。おかげ様で会報は順調に発行できます。本当に有難うございました。郵便振替の通信欄に書かれましたお便りをまとめました。事務局に到着した順に掲載します。

(敬称略)

内外激動の時節、河上肇の偉大な業績と不拔の思想を一層国内にひろげ、会の発展を祈ります。

(西宮市 山本 格也)

会費をお送りします。皆様のご健康を祈ります。

(岩国市 河上 莊吾)

ようやく冬らしい寒さになりました。昔読んだ自叙伝を又少しづつ読み返し、改めて敬愛の心を深めます。会の盛んならんことを願っています。(神戸市 曾我 まり)

いつも、お世話様です。今号の会報読みがいがあり、おおいに学ばされました。例年にならない深い雪の中から。(福島県 鈴木 元夫)

新年をむかえ事務局の方々、大変ご苦労さまです。三年分の会費とカンプ送付します。会発展のため頑張ってください。(仙台市 高橋 康則)

一九九〇年度分が納入されているかどうか分かりませんが、もし未納でしたら請求して下さい。

(長野県 山下 千一)

会報有難うございました。今度のはむずかしいのばかりですな—本当によいのでしょうか無学者には気楽な読物も交えて下されば幸甚に存じます。勝手申しますがよろしく。会費どこにも書いてないので取敢えず四千元送りました。

(上野市 沢田 嘉夫)

京大での講演会特集(三五号)は、とてもうれしい企画だと思いました。読んでみると講演の先生方の真剣な表情がとび出してくるような感じになりました。役員の方々も、ご苦労さまでした。

(京都市 岸本 正美)

会報三五号興味深く拝見しました。やはり池上氏のものが面白く同感の部分多くあります。若い世代への河上先生の思想と生き方の継承を願う

ています。

(和歌山市 竹中 章)

おそくなりましたが会費をおくり
ます。勉強しなければと思いながら
も安易な毎日をおくっています。

(守山市 美濃部和夫)

前略 いつも何かとお世話さまで
ございます。△費が大分未払いになっ
ておりまして申し訳ございませんで
した。次の通り送金させて頂きます
のでよろしくお願い致します。

一九八九〜一九九一年度 計三年
分 (京都市 内藤 昭子)

会報ありがとうございます。近年
難聴のため秋の会合を欠席して居
り残念です。マイクホンつけて頂
くと補聴器利用の耳でも聞こえる
と思うのですが設備がむつかしいので

しょうね。会報に詳しく様子のせら
れて居りますので大変喜んで居りま
す。前回は会員外の方が大勢見え
ようによかったですね。ご苦労さ
ました。(西宮市 富田 健一)

会報No三五「河上肇生誕百十周年
記念講演会特集」を有難く拝受いた
しました。早速一気に読了して、深
く感銘しました。講演会が盛大に行
われましたことを衷心よりお祝い申
上げます。小生、老衰のため出席
叶わず残念至極でありました。「記
念会」の一層の発展を祈ります。

(西宮市 石井 公代)

会報No三五有難うございました。
ゆっくり読ませていただきます。会
費お送り致します。

(熊本市 井上 栄次)

九一年、新春おめでとうございま
す。

一月十日待ちのぞんだ会報一年ぶ
りに拝受いたしました。昨秋事務局
紀平様より会報遅延に就いてのお手
紙をいただきました。不如意つづき
のおもむき、深く推察いたします。
願わくば定期刊行の実現を希望しま
す。本年分会費をお届けしました。

(豊栄市 有田惣三郎)

会費とカンパです。記念講演会、
御成功おめでとうございます。(多
額のカンパを賜りました。深謝いた
します。事務局)

(静岡県沼津市 松本 栄)

いろいろお世話になります。年末
に南君と会いました。又一度お会い
しましょう。河上記念会のますます
のご発展を祈ります。

(川西市 宮本 雪男)

河上肇記念会会報No.三五有難く受け取りました。生誕一〇周年記念特集で盛大だった講演会を思い浮かべ乍ら講演内容をあらためて読み直しております。

講演会感想に記載されている調布市の河上美奈子様より当日会場で声を掛けられました。河上肇は私の祖父の兄に当たるとの事ですので東京物理学校教授された暢輔様のお孫様かと拝察致します。「河上肇と私」を御投稿頂ければと存じます。

会報には会則記載ありませんが、会費は従来通り送付致しますが、不足の際はご一報をお願い致します。

(堺市 小田 正大)

二年分会費です。新しい事務所！心機一転頑張ります。

(徳島市 中谷 武雄)

一九九一年度会費をお送りします。遅れて申し訳ありません。年明けから流感にかかり、こじれて今日にいたりしました。なお、金額(会費額)についてはどこにも書いてありませんので、これまでと同額にしました。不足の場合はお知らせ下されば追加お支払いいたします。

(鎌倉市 宇高 基輔)

会報No.三五、頂戴致しました。ありがとうございます。

(京都市 思文閣 田中 周二)

平成三年度会費として表記の金額を振込ましたから御査収願います。

(京都市 羽村二喜男)

一年余、日本を留守にしております

したので会費の納入が遅れたことをお詫び申し上げます。河上肇生誕百十周年記念会講演会の特集を大変興味深く拝読致しました。

(豊橋市 宮崎 鎮雄)

専ら会報を送っていただく年月が長く続き事務局の皆様の御負担をおかけしてきたことを心苦しく感じています。

最近表記のところ(札幌市手稲区新発寒二条四丁目二一四)に転居しました。振込みの金額些少ですが、これまでの郵送料にあてていただければ幸いです。「会」のご発展を祈念しています。

(札幌市 国中 拓)

飛騨地方は五六年豪雪以来の大雪です。近来にない厳しい冬ですが、国の内外も大変な時を迎えているよ

うです。

(岐阜県高山市 池之端甚衛)

何年分まで会費を払っているかわからないのでとりあえず一年分お送りします。今回の会費は内容に重みを感じております。

(京都市 京藤英一郎)

いつもお世話に相成りおりありがとうございます。

昨九〇年総会は他行しており出席出来ませんでした。下記二名分の会費です。

(兵庫県 古池 信一、孝子)

九一年度の会費をお届けします。会報の発行、御苦労が多いと思いますが楽しみにしておりますから頑張ってください。投稿は自由にしてもよろしいのでしょうか。編集方針がよく

わかりません。締切等も。

(小牧市 岩本 桂)

——投稿大歓迎です。特に編集方針はありませんが、河上肇とのかかわり、思想や生き方に対する感想、意見等、あるいは記念会に対する注文や提案等を自由に投稿して下さい。締切日はありませんが、年四回発行予定で、到着順に掲載いたします。——

会費三千円お送りします。当方古書店(東方書店)をいたしておりますが、先日河上先生の「遠くでかすかに鐘が鳴る」上下二冊を入手いたしました。(昭三三年刊、第一書林)はじめて目にしましたので、お耳よごしにまで一筆したためました。

(京都市 畠山たかね)

いつもありがたく存じております。体調をくずして病院生活をしていま

した。快方ですからご安心下さい。

(岸和田市 田辺 平)

とりあえず三千円お送りします。しかし、ここ数年来、本人並びに家族の入院その他で、失念滞納があるかも知れません。若しその折は御面倒ですが御一報お願いします。

(岸和田市 藤基 長晃)

前略 河上肇記念会事務局のお世話ご苦労さまです。マルクスやエンゲルス、そして河上肇などが説き、めざした「科学的社会主義」の全く無縁で逸脱した自称社会主義国の崩壊は当然でした。イラクの無法なクウェート侵略、アメリカの先ばしつた人殺しの湾岸戦争をとどめる力は、人民の知恵と科学的社会主義の理論の發揮以外考えられないのでは？

(明石市 若林 正昭)

「会報」No.三六、すばらしい出来で、興味ぶかく拝読させていただきました。編集部の無償の御苦勞に敬意を表します。

「会報」中、「西田幾太郎」という表記を散見しました。いうまでもなく、「幾多郎」であり、近頃顕出するワープロ誤植のたぐいと拝察いたしますが、河上肇と西田幾多郎は京大の同学であるばかりか、福本和夫や三木清との関わりにおいて、経済学者河上は哲学者西田と学理上の相関もありますこと故、かつは特に御当人にとっては唯一無二の人名のこと故、次の機会に正誤されてはいかがか、と。頓首

(藤沢市 いいだ もも)

前略 河上肇先生の入会のすすめ度々御通知いただいておりますが、寝たきりが長く平成三年一月二十三

日朝死去いたしました。あしからず御了承下さいませ。先は御通知迄

(奈良県 伊瀬 幸太郎 遺族)

前略 過日は会報をお送りいただきまして有難うございました。

大泉宗次、一昨年八月以来療養生活を致して参りましたが、昨年十二月二十一日、九十四才の天命を全うして永眠致しました。右、お届け申し上げます。(尼崎市 大泉 ちえ)

河上肇自叙伝が古本屋で百円で売っています。(昭和二十四年発行定価百八十円也)日本の国は河上肇、尾崎萼堂の本がもっともっと高く買われる時代が来ないと良くならないなあと思いました。日本の国が根本的に見直されねば良い国になりません。嘆かわしい時代になりました。何卒よろしく 謹言

(八尾市 青木 吉忠)

事務局の皆様、本当にありがとうございます。会報は大変おもしろく読ませていただいています。

(秋田県大館市 佐藤 力美)

会費お送り申し上げます。担当される方々の御努力に敬服いたします。

(奈良市 内田 穰吉)

今日、会報No.三六を精読しました。事務局の方々のご苦勞に御礼申し上げます。

私が、空想的なキリスト教社会主義から科学的社会主義に前進脱皮できたのは河上先生の御著書のお蔭でした。今七十二才ですが、最後まで会員に加えていただきます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(東京都 渡辺 達也)

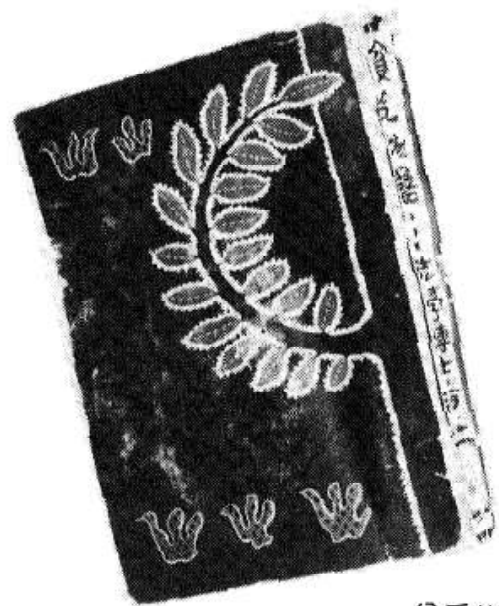
△お願い▽

京都市左京区の安井美好様より次のようなお手紙を昨秋いただきました。関係者に当たって見たのですが、現在まで不明です。お心当りの方がございましたらご連絡下さい。

「…………略。河上先生よりいただいた品、わが家の家宝とも思っていた品のことを相談したのです。これは京大の方で河上会（祭？）の時はいつも出品されるのでいつもわが家の方に借りに来られていた品です。始めは其の都度返していただいていたのですが、丁度昭和五十年頃に主人（安井信雄様）が病氣になりついに五十一歳亡くなって其の前後頃より返していただいてないことを相談したのです。…………略」

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は事務局へご一報下さい。



貧乏物語 初版

〒571 大阪府門真市元町二二四

沖本彰税理士事務所内 河上肇記念会

電話

(〇六) 九〇六―八〇三八

振替口座

大阪 三二三一九五

入会のすすめ

河上肇記念会は、一九七三年に発足して満十八年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介します。下さい。



会報(回覧雑誌)

河上肇記念会 会則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。
- 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
- 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
- 四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。
- 五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認をえる。
- 六、世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。
- 七、この会則の改廃は総会の議決による。

会費は年額三〇〇〇円とする。